

15 神経症状の改善を目的に生体部分肝移植を施行した Wilson 病の一例

五十川 修・藤田 信也*・市田 隆文**
佐藤 好信***

長岡赤十字病院消化器科
同 神経内科*
新潟大学第三内科**
同 第一外科***

症例は 17 歳女性。平成 11 年春より流涎等の症状が出現し、次第に精神神経症状が増悪した。平成 12 年 2 月 14 日肺炎の診断で六日町病院に入院。同日夜痙攣を認め、2 月 15 日に当院神経内科に紹介入院となった。尿中銅高値、セルロプラスミン低値、Kayser-Freischer 輪より Wilson 病と診断された。肝は代償性肝硬変と考えられた。D ペニシラミン、アーテン大量療法等を行うも、神経症状は改善せず、更に副作用と考えられる免疫グロブリンの低下を認め投薬を中止した。神経症状の改善を目的に、同年 11 月 30 日新潟大学にて父親をドナーとして生体部分肝移植を施行した。移植後、徐々に神経症状の改善を認めた。

16 生体肝移植を施行した原発性肝アミロイドーシス

新沼亜希子・畑 耕治郎・小林 良太
黒田 兼・古川 浩一・五十嵐健太郎
何 汝朝・月岡 恵・市田 隆文*
佐藤 好信**・伊藤 聡***

新潟市民病院消化器科
新潟大学第三内科*
同 第一外科**
同 第二内科***

症例は 54 歳、男性。

【主訴】腹部膨満感、体重減少。

【現病歴】1999 年 1 月より腹部膨満感を自覚、さらに 2 か月間で 9kg の体重減少がみられ 6 月 14 日受診、著明な肝腫大と肝機能異常が指摘され 7 月 1 日入院した。

【経過】尿免疫電気泳動、肝生検にて原発性アミロイドーシス (AL; κ 型) の診断を得た。その後

の経過で肝腫大はさらに増強し、腹部膨満感が極めて強く、また腎機能も徐々に低下していった。2000 年 6 月、血液透析導入後、本人の希望により同月 27 日妻をドナーとした生体肝移植を行った。術後の経過は順調で、現在週 3 回血液透析を行っているが、患者の ADL は著しく改善された。

【考察】一般に原発性アミロイドーシスでは肝移植の適応はないとされている。欧米では脳死肝移植例が報告されているが予後についての一定の見解は得られていない。本症例はわが国では初の肝移植例であり、移植により患者の ADL は著しく改善され、現時点では有効であったと考えられる。

17 生体肝移植を行った若年性巨大肝細胞癌の一例

黒田 兼・小林 良太・古川 浩一
畑 耕治郎・五十嵐健太郎・何 汝朝
月岡 恵

新潟市民病院消化器科

症例は 23 歳女性。1999 年 5 月以降無月経となり、9 月 8 日当院入院。CT 上肝右葉に径 24cm の cystic tumor を認めた。悪性腫瘍を疑ったが切除は困難と考え、CDDP 動注と温熱療法を施行。しかし腫瘍径に変化なく、腫瘍切除へ方針を変換した。2000 年 2 月 18 日開腹術を施行。肝左葉に転移を認め、腫瘍から大量に出血し切除不能。腫瘍の一部を採取し低分化型肝細胞癌と診断した。有効な治療法がないことから、母親を提供者とする肝移植の適応を考え、京都大学移植外科へ検討を依頼。8 月 2 日生体肝移植を施行。その後 9 月 21 日当院へ再転院した。術後 6 か月の検索では再発を認めていない。非 B 非 C 型で、非癌部はほぼ正常肝という特殊な例ではあるが、切除不能の巨大肝細胞癌であっても肝外転移が認められない場合、肝移植は有効な治療となりうると考えられた。